

—《書 評》—

市川紘司著 筑摩書房

『天安門広場——中国国民広場の空間史』

(東京経済大学) 吉見 崇

本書は、新進気鋭の建築史家が、博士論文を基に上梓した一冊である。すでに著者は、編著書『中国当代建築——北京オリンピック、上海万博以後』（フリックスタジオ、2014年）など現代中国建築の研究を世に問うているが、本書は、タイトルが端的に表しているように、天安門広場の歴史について分析したものである。

本書のねらいは、おおよそ次の2つと言えるだろう。第一は、従来の「明清時代の『古い』天安門広場と1949年以後の『新しい』天安門広場」（26頁）というとらえ方では零れ落ちてしまう中華民国期を、天安門広場誕生の「前日譚＝プリクエル」として描出することである。そして第二は、中華民国期から1949年の中華人民共和国成立後を、これまでのように断絶性のみを強調するのではなく、連続性も重視して位置づけなおすことである。本書の目次は、以下の通りである。

- 序 章 「革命史観」からこぼれ落ちた歴史
- 第一章 禁地開放
- 第二章 広場を奪い合う——五四運動とその後
- 第三章 揺れる位置づけ——一九二〇～三〇年代の建設と計画
- 第四章 メディアとしての天安門
- 第五章 一九四九年に切断線を引く——中国共産党とその「空間政治」
- 第六章 東西軸の創出、南北軸の延伸
- 終 章 「施設」以前・以後

紙幅の関係で、各章ごとに内容を紹介することはずせず、上述した2つのねらいに即しながら、本書の主張を概括したい。

まず、「前日譚＝プリクエル」たる中華民国期

について。辛亥革命によって宣統帝溥儀が退位し、清朝は滅亡したものの、溥儀は紫禁城内に住み続けたため、天安門は引き続き「不可視」の存在であった。1913年になって、天安門が面する宮廷広場はようやく開放された。こうした変化を、著者は空間構造の「反転」と指摘する。すなわち、それまで宮廷広場が空間的に連携していたのは紫禁城であったが、開放後は紫禁城との連続性が遮断される一方で、逆に北京内外城の主要エリアとの連続性を高めた。

著者は、この「反転」こそが、その後頻発する民衆運動で広場が度々利用される要因になったと述べる。1919年の五四運動で広場が集合地点として選ばれた理由は、「北京の中心に立地し、誰もが自由に無料で出入りすることができ、東交民巷に近い大きなオープンスペース」(102頁)であったからという。そして五四運動以後の広場は、デモ活動の「最初の集合地点」ないしは「最後の目的地点」として、北京城内の市街空間と一体的に利用されていく。こうした事実は、前述の「反転」を具現化したものである、と著者は定位する。

国民党政権の成立によって、北京は北平と改称され、首都の座を南京に明け渡すことになった。紫禁城は故宫博物院となり、同院の理事会は、紫禁城と広場を一体化して同院の範囲とする要望を、国民党政権に提出する。著者は、この要望を、前述の空間構造の「反転」という指摘に引きつけながら、再度の「反転」を試みたものと表現する。ただ、著者自身が認めるように、この要望は社会的インパクトに欠けるものであった。むしろ国民党政権期の天安門について注目すべきは、メディアとしての機能であった。

国民党政権期の天安門には、国民党総理である孫文の肖像画が掲げられ、さらにその跡を襲った蒋介石の肖像画も掲げられるようになる。また、未完に終わったとはいえ、孫文の肖像画に加えて、孫の銅像や「中山路」を用意することで、広場を

孫の記念広場にしようという動きもあった。著者は、このようなメディアとしての利用に、北京政府期から国民党政権期への連続性を看取する。袁世凱が天安門城楼に登って行った観兵式に、すでにその性格は見られたのである。

さらに、このメディアとしての利用という連続性は、その後の日本占領下の北京だけではなく、中華人民共和国期へも続いていった、と著者は主張する。これこそが、本書が明らかにしようとした第二の点、すなわち中華人民共和国期への連続性である。それは、「近代国民国家に不可欠な『国民』意識を惹起する国家祝祭の舞台として開放的で巨大な天安門広場を整える」(241頁)という断絶性と併存していたのである。

では、中華人民共和国期におけるメディアとしての利用とは何を指すのか。著者が挙げるのは、1949年の建国セレモニーである。この建国セレモニーに端を発する天安門祝祭は、1950年代の10年間に定期的かつ拡張的に繰り返される。ただ、当該期を20世紀の天安門広場史のなかで位置づけた時、それは異例の事態であったという。中華人民共和国は、1959年に成立十周年を迎えるが、周知の通り同時期に大躍進の失敗が露呈したことで、祝祭の時代は終わる。

文化大革命の発動後、天安門広場は性格を変えた。それまでの祝祭の舞台から、毛沢東と紅衛兵が出会う「接見の間」へと変化したのである。しかし、接見は文化大革命初期に集中的に実施されたものであり、天安門広場の性格を一瞬変えたに過ぎなかった。

先述のメディアとしての天安門という連続性に加えて、著者は1949年を跨ぐもうひとつの連続性も指摘する。北京の都市計画で天安門広場が中心点と位置づけられるという連続性である。具体的には、日本占領下の北京の都市計画において、長安大街が創出され、北京の中心点は紫禁城から南下した。日本人が立案したこの計画は、その後に

天安門広場となる場所を、明確に中心点と自覚していたわけではなかったが、中華人民共和国成立後にそれが「発見」された、と著者は主張する。

以上が本書の概括的紹介である。本書は、建築学を専門としない読者に対してもわかりやすい叙述となっており、また多数引用される写真と図は読者の理解を大いに助けてくれる。改めて、本書のねらいと主張を照らし合わせれば、これまで等閑視されてきた中華民国期の天安門広場史を解明し、当該期から中華人民共和国期への連続性を浮かび上がらせるという目的は、十分達成されていると言えるだろう。

ただし、本書の議論を前提にして、以下のような論点について探究する必要があると思われる。第一に、国民党政権期の北京(北平)の位置づけである。既述のように、北京は国民党政権期になって、首都の地位を南京に奪われた。首都か否かという点は、本書の成果を、天安門広場の通史という枠を超えて、近現代中国の政治文化史へと昇華させる時、決定的に重要であると考えている。もちろん著者自身もこの点を意識しているが(174頁など)、もう少し強調されてもよかったのではないかと感じた。

第二に、中華人民共和国期の首都北京の都市建設をめぐる攻防についてである。これは必ずしも本書の主題ではないが、共産党政権とソ連(の専門家)の間、また共産党政権内での攻防は、計画案の変容が淡々と述べられる本書からは、あまり読み取れない。無論、史料的制約があることは承知しているが、例えば近年の研究では、首都北京の都市建設において周恩来より彭真の影響が強かった、という指摘もされており⁽¹⁾、著者の今後の研究の深化に強く期待するものである。評者の理解力不足による誤謬や不明瞭な議論を含むことを恐れるが、著者ならびに読者のご海容を乞いたい。

末尾ながら、気がついた誤記について。1924年

の北京政変を起こしたのは「馮国祥」(60頁)ではなく、「馮玉祥」の誤りであろう。五四運動が発生した時、李長泰なる人物が「総統・袁世凱の命を受けてやって来た」(98頁)とあるが、袁はすでに没していた。孫文の遺体が安置された北京香山の寺名は「碧山寺」(157, 181, 205頁)ではなく、「碧雲寺」。国民党北平政治分会主席の「張續」(216頁)は、「張繼」が正しい。

(2020年8月, 480ページ, 4,400円+税)

[注]

- (1)鍾延麟「彭真和北京市的『大躍進』運動——工農生産及城市建設(1958～1960)」(『中国大陸研究』第60巻第3期, 2017年9月)。

◆ 中国研究所 定例学術研究会 ◆

1. 発表者の募集:

『中国研究月報』に論文・研究ノートを投稿予定の方を中心に、発表者を募集しています。

応募者は、下記「2」から発表希望時期を明記の上、論題と発表要旨(300字程度)を本研究所のメールアドレス(下記)に送信してください。応募者数により、発表日の調整をお願いすることがあります。

申込期限は、発表希望日の前月第1金曜17時までとします。

2. 開催日程:

毎四半期の第3の月(3, 6, 9, 12月)の第1土曜14～17時とし、年4回開催することを原則とします。

※当面はオンライン開催になる場合もあります。

3. 参加者:

本研究所理事、『中国研究月報』『中国年鑑』編集委員が複数名参加し、司会とコメンテーターを担当します。

一般参加者は所員・研究会員に限らず参加できます(参加費は無料)。下記連絡先までお申し込みください。

一般社団法人 中国研究所 〒112-0012 東京都文京区大塚 6-22-18
電話:03(3947)8029 FAX:03(3947)8039 E-mail: c-chuken@tcn-catv.ne.jp